
紡がれる絆(コープル×フィー、セティ×リーン)

エフリィ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

紡がれる絆（コープル×フィー、セティ×リーン）

【Nコード】

N1863B

【作者名】

エフリイ

【あらすじ】

コプフィー、セティリーSS。フィーを見上げ、想うコープルがメインです。ちなみにセティには、聖光を持つ者（聖戦士の血Ⅱ竜族の血を引く者）が分かるようです。

城の中で負傷者を治し終わった後の一時、コープルは窓の近くに座って空を見上げる。

そんな時の彼の心を占めているのは一人の少女。

その少女との出会いはごくごく普通なものだった。

あれはコープルがセリス軍に加わって大方挨拶を済ませ終わった頃。突然バサバサツと言う羽音がした。

空を見上げると一頭の羽のある白い馬が自分から少し離れた所に着地した。

そして、そのペガサスからショートカットの明るい緑の髪と目の少女が下りてきた。

その少女はオシャレなイヤリングを付けている可愛らしい少女で、少女は驚いて目を丸くしている自分を見て、笑いながら馬と共に近寄って来た。

「こんにちは、あなたがコープル？」

少女が明るく話し掛けてくる。

「あ、はい！」

「私フィーよ、宜しくね。」

「こちらこそ！どうかよろしくお願いします」

「そんなにかしこまらなくても・・・あれ？この子が気になる？」

コープルが彼女の隣にいるペガサスに視線を注いでいると、フィーがそれに気づいて聞いてきた。

「あ、その馬はペガサスですよね？」

「そうよ。マーニャって言うの。」

「ぼく、ペガサスって初めて見ました・・・かわいいな。」

「ふふ、トラキアには住んでないもんね。そっか動物が好きなんだ。」

良かったら撫でてあげて、とってもおとなしいから。」

「いいんですか？・・すごく優しい目をしてる・・。」

マーニャは彼が撫でると嬉しそうに目を細めて頭を垂れた。

しばらく撫でた後マーニャから手を離してフィーのほうを向く。

「フィーさんは天馬騎士なんですね、カッコイイです！」

「え！？やだゝただの見習いよ。」

お母様や叔母様が立派な天馬騎士で・・私もその二人みたいになりたくて。」

「フィーさんは偉いです。・・ぼくも早く強くなりたい。」

「そう言われると何だか照れちゃうな。あ、いけないそろそろ行かなくちゃ！」

「あの、時々遊びに行ってもいいですか？」

「もちろんよ。マーニャと待ってるから遊びに来てね！」

「はい！」

そう言い残すとフィーはひらりとマーニャにまたがって飛んで行ってしまった。

はっとして我に返る。

空を見ながらいつの間にか思い出に浸っていたらしい。

最近では暇さえあれば空を見上げていると思う。

城内でも彼女の姿を見つけるとたまらなく嬉しくなり、

見かけなかったり話ができない時は寂しさが残った。

彼女の事が好きになっていく自分に気づいてはいたのだけれど。

それ以来コープルは上空にフィーを見つけるとその姿を目で追った。フィーもコープルに気がつくと手を振ってくれる。

機会があるとコープルはマーニャのいる厩に顔を覗かせに行き、

彼を撫でたりフィーと喋ったりする。

彼女は明るくてとても親切にしてくれた。

大分打ち溶けてきたころマーニャは自分を見るといなくなってしまう。

ある日の事。

コープルが厩に向かってしていると

フィーとアーサーがなにやら話し込んでいるところに遭遇し、慌てて物陰に隠れた。

フィーは呆れたように去って行こうとするが

アーサーがそれを引き止めては何かを話し、嬉しそうに頭をかいて
いる。

ズキッ

（あれ？何だろう・・・ただ単にフィーさんとアーサーさんが話して
いただけなのにな）

コープルは逃げるようにその場を去ったのだが

二人が話をしていた光景が気になって方がなかった。

だがどうしたらいいか分からずため息をつく。

もう一度上を見上げたとき、

城の周りを警戒してゆっくり旋回しているフィーが目に入り、その
姿を追う。

と、そこへ踊り子のリーンが・・・

「？」

一人で外を眺め、

ぼんやりしているコープルを見て気づかれないよう近寄り

「何してるの？コープル。」

と声をかけた。

「うわぁ・・・あ、リーンさん。」

コープルは突然声をかけられた驚きで胸を抑えながら彼女の方に向
き直る。

そこにはリーンがクスクスと笑って立っていた。

「コープルが大声出すのを初めて聞いちゃった。どう？ここにはも

うなれた？」

「はい。」

「となり、いい？」

コープルの中で「踊り子」は

男性に媚びる事しか考えてないような気がして嫌いだったのだけど、リーンと出会って話をして、誇らしげに踊る彼女を見てだんだんその気持ちも消えてきた。

今では何かと世話になっているうちの一人だ。

「はい。どうぞ」

自分が端に寄って彼女がストンと隣に座ってきた。

「どうしたの？ 沈んだ顔をしてるわ、悩み事？」

優しく聞いてくれるのにつられて

「あの・・僕は女の人から見てどう思われているのでしょうか？」と深く考えずに聞いてみた。

「??・・あ、もしかして・・好きな子でも出来た？」

自覚したばかりの気持ちをいとも簡単に見破られて、コープルは顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「あら、当たっちゃった？ うふ、ところで誰を・・」

と、リーンはコープルが外を見ていたのを思い出しヒョイッと窓の外を見ると、

フィーが敵を警戒して城の周りをゆっくり旋回しているのが目に入った。

「はーん、さてはあなた・・」

「違います!! 僕はフィーさんとそこまで仲良くないですし・・・。」

リーンが窓の外を見てマズイ! と思ったコープルの予感は見事に当たった。

立ち上がって顔を真っ赤にして否定しているが、

リーンの目から見ると全面的に肯定しているようなものだった。

「私、まだフィーとは言っていないんだけど?」

全てお見通しと言うリーンの表情を見てコープルはしおしおと席に戻った。

「でも、ぼくは力も全然ないですし…皆に守ってもらっているだけで何も出来なくて…」

しばらくコープルの言うことを静かに聞いていたリーンだったが拳を握って突然立ち上がるとものすごい勢いでまくし立て始めた。

「コーープル！！！あなた自分に自信なさ過ぎよ！！」

あなたの杖を扱う腕は軍一だとセリス様たちも誉めていらっしたでしょう！

戦うばかりが大切なことじゃないの、あなたは十分役に立ってる。皆の力になってるわ！そんな事を気にしないの。わかった！？」

軍に入って間もなく、

コープルは優れた杖の使い手として皆に知られるようになっていたのだ。

「あ…あの…」あまりの迫力にコープルは圧倒されていた。

「返事は？」リーンがすごんでくる。

「は、はい！！」

「よろしい。」

それを聞いたリーンがにこっと笑う。

「そうだわ、いい事教えてあげる。実はね…」

耳打ちされた言葉にコープルは仰天した。

「ええ！？セティ様と！？うっ…」

コープルの口が手で塞がれる。

「シー！声が大きいって！！」

そ、そりゃ昔はアレスが気になってた時もあったけど彼はナンナを選んだ。

切なかったけどなぜかすぐ吹っ切れてしまったの。だってね…腕の中でもがいているコープルを押さえつけてセティを好きになりたいきさつと、

思いが通じ合った時の事を一人で語り始めるリーン。

自分が語り終わった後にやっとコープルを離れた。

ゼーハーとコープルが息を弾ませている。

——リーンさんは本当にセティ様が好きなんだ・・・と、とても素直に思えた。

「だ・か・ら・フィーとあなたがうまくいったら私達姉弟よ。」

「あ。」

「フィーったら私をもう義姉さんなんて呼ぶのだから照れるわよね——！！」

直後、背中に何回か衝撃が。

「うっ・・・」

「あなたみたいな弟が出来たら嬉しいし、応援するから頑張るのよ——！！」

再び背中に衝撃。

「うっ・・・あ、ありがとうございます！おかげで元気が出てきました。」

コープルが背中をさすりながら答える。

「そうだわ、ちょっと練習だと思って言ってみて。」

「え：でも・・・」

「いーから。」

「はい・・・リーン：姉さん？」

「そうそう。」

不意にリーンが目元を和ませて手を伸ばし、そっとコープルの頭を撫でてくれた。

「あ・・・あの・・・」

コープルは恥ずかしくて俯いた。

「じゃあそろそろ行くわ、またねコープル」

笑ってリーンが去って行く。

コープルはその後ろ姿を見送っている時に、

ふと、リーンの体を清らかな光が包んでいるような錯覚に襲われた。なでられた頭が温かい。

一方、リーンがすぐ側の廊下を曲がるとそこには思いがけず恋人の姿が。

「セティ様！」

「まったく：少しの用事だと言ってなかなか戻ってこないから心配して来てみれば」

セティがやれやれと溜息をついた。

リーンが来た方向に一瞬視線を送ると彼女に視線を戻した。

「あの少年、コープルだったかな？」

「聞いてらしたのですか？でも、私はあの子を応援すると決めましたからね。」

妹が取られると思って邪魔しては駄目ですよ！」

挑戦的なリーンの様子にセティは笑った。

「ははっ、フィーが選んだ男なら私はかまわないよ。だがフィーは鈍いからね。」

コープルには可哀想だけど。」

「もう、そんな事言うもんじゃありませんよ！」

「フフ、彼の頑張りに期待しよう。」

セティはふと、自分の前にいる恋人が眩しくなったような気がして目を細める。

コープルを初めて見た時にも彼の体を光が包んでいるような感覚があった。

どうかすればこの軍の中心人物達に、あるいは全ての人物に。

「セティ様？どうされました？」

「いや、何でもない」

きっと考えすぎなのだろう・・・

フィーが偵察から帰って来る時刻、

コープルが少し遅れて厩に行くときフィーが珍しく何かを考え込んでいる様子で

マーニヤの鬘を撫でていた。

コープルに気が付くと笑顔に戻って迎えてくる。

しばらく二人は他愛無い話をしていたのだが、

コープルが養父ハンニバルの話を始めると、

いつもは明るいフィーの表情が少しずつ曇ってしまった。

「コープルはいいな、あんなに優しいお父さんがいて。」

フィーがポツリと呟いた。

「・・・私のお父さんなんか家族を置いて出て行ってしまう人だもの。やっと会えた今だってそう!」

フィーの声が突然荒くなる。コープルが怪訝に思い

「フィーさんのお父上がこの軍に?」

と聞くとフィーが力なく答えた。

「そうよ。・・・レヴィンさん。あ、ごめんねさっきは怒鳴ったりして。」

「いいえ・・・そうだったのですか・・・。」

言われてみれば確かに似ていると思う、特にセティ様に。

「コープルは神父様になるんだよね?」

レヴィンの事を思い出していた所にフィーからの質問が来て、慌て彼の事を振り払う。

「はい。今は見習いですが・・・?」

「話聞いてもらってもいいかな?」

「何でもどうぞ。・・・僕で力になれることでしたら。」

フィーは少しずつ亡くなった母上の事から話を始めた。

彼女や、彼女の兄上がレヴィンさんと話そうとしないのはそのせいだろうか。

彼女の話し方には父への怒りと恨みが溢れていたのだけれどそれ以上・・・

「・・・フィーさんは・・・今までとても寂しかったのですね。」

彼女があらかた話し終わってしばらく沈黙したあとにコープルが口を開く。

フィーは虚をつかれた驚きと、

予想以上に優しく染み込んできたその言葉に動揺を隠して無理に笑顔を作る。

「全然平気！だって私にはお兄ちゃんがいるし皆もいるし。

：ご両親や兄弟を亡くされた人達に比べれば恵まれすぎているもの・
・」

そう言いながらもフィーは俯き、声がしぼんでいく。

前を向いたまま落ち着かないようにマーニャの鬘をいじっていた。

「フィーさん、父さんが教えてくれました。

苦しみって人と比べるものじゃないんだって。

だからフィーさんが辛いなら・・無理をしなくていいですよ。」

「そうかな？」

「そうですよ。」

力強くコープルが言うのとフィーがちらりと笑みを見せた。

「ありがと。聞いてもらえてスツとしちゃった。

・・今まで誰かに聞いて欲しかったけど言えなくて・・。」

「よかった、フィーさんが笑ってくれると僕も嬉しいです。」

「え？やだコープルってば！！」

フィーが少し顔を赤らめた。

「コープルはきっと素敵な神父様になれるね。

また、話を聞いてもらってもいいかな？」

「もちろん！いつでもいいですよ。・・頼りないかもしれませんが
ど」

「え！？そんな事ないよ！すごく頼もしく見えちゃった。」

「そうでしょうか？」

「うん！」

トラキアでの最後の戦いが終わった後。

コープルは杖の力を使って次々と運ばれてくる怪我人を癒していた。
フィーの姿が見えなかったので、

多分また遠征をして帰ってくるのが遅れているのだろうと思った。しばらくして厩の方に降りていくマーニャとフィーを目撃し、コープルは一段落が着いたところで急いで彼女の元に行った。しかし着いてみるとフィーはどこかに行っているらしく姿が見えなかった。

既に厩の中にいるマーニャは自分を見ろといかないた。

近寄ってそっとマーニャを撫でると手に頭をすり寄せてきた。

「コープル？」

近くから声がして、

見ると厩の壁の後ろからフィーが飼い葉を入れた桶を持って出てきた。

「え？どうして分かるのですか？」

「あなたが来るとマーニャが嬉しがって鳴くからよ。」

フィーはもう一度いなきをあげたマーニャを見た後、コープルに笑いかけた。

飼い葉をマーニャの前に押してやると目を細めて食べ始めた。

その時コープルの目にとまったのは彼女の肩に巻いてある包帯だった。

：おそらく布を裂いて自分で巻いたのだろう。

重傷ではないようだがうっすらと血が滲んでいる。

どうしたのかを聞き慌ててその場でライブをかけた。

矢がかすってできたものらしい。

「ありがと。・あはは・ドジよね〜これじゃお母様やおば様に笑われてしまうわ。」

恥ずかしそうに笑う彼女を見ていて、

コープルはあまりに無力な自分かもどかしかった。

「・・悔しいです。」

「え？」

「僕にもっと力があればフィーさんを守ってあげられるのに。」

「コープル？」

いつもは穏やかなコープルが珍しく見せる怒りを含んだ表情と言いは方にフィーは驚いた。

「あ・・・すみません・・・。」

しまったと思い慌てて謝る

「ううん、そう言ってくれてありがと。コープルは本当に優しいね。」

「いえ・・・。」

二人は厩の外に出ようとした。

しかしマーニヤが突然コープルのローブを噛んで軽く引っ張った。

「わっマーニヤ？どうしたの？」

コープルがマーニヤの口からそっと噛まれたすそを抜こうとするがマーニヤは離さなかった。

マーニヤの目を見るとマーニヤは何か言いたそうな顔つきをしている。

「？何？」

「マーニヤったら・・・。」

フィーが軽くマーニヤをつつく。

「コラ、だめでしょマーニヤ。離しなさい。」

しかしマーニヤは離さない。

変わりにコープルをフィーの近くに引っ張り寄せた。

それでコープルはマーニヤが何をしようとしているのかを悟った。

・・・どうやら言うまで解放してくれそうにない。

「ごめんねコープル・・・もうマーニヤったらどうしちゃったの？」

フィーが困ったようにマーニヤを見るが、

マーニヤはローブのすそを噛んだままコープルの方をジッと見つめている。

「あ・・・こんな時に聞くのもなんですが・・・。」

「何？」

「あ・・・あのあの、フィーさんはお付き合いをしてる人とかいるんですか？」

一瞬フィーはキョトンとしたがすぐに笑った。

「えー!! まさかあいるわけないじゃん!!」

「(あれ?) でもアーサーさんと・・・ごめんなさい!

ずっと前に中庭でお二人でいる所を見てしまつて・・・」

「やだ見てたの? アーサーがユリアとのノロケ話をしに来ていただけ。」

もう最近ユリアのことばかりでさ。あ、ティニーのことも言うけどね。」

「?・・・そうだったのですか? でもティニーさんの事はどうしてです?」

「セリス様にティニーを取られちゃったからちよつとね。」

思い出して呆れている様子のフィーとは対照的にコープルの表情は明るかった。

「あの、フィーさん・・・もしよければ僕とお付き合ひして下さい!!」

突然の申し出を理解できずフィーはキョトンとしていた。

だが、コープルが言ったことを思い出すうちに顔が熱くなって来た。

「あの・・・コープル? その・・・本気なの?」

「もちろんです!!」

コープルの声が辺りに響いた。顔は耳まで真っ赤である。

フィーは自分も顔を赤くしながら小さく

「コープル・・・あの、実は・・・」

と言いかけたが緊張のあまり頭が真っ白になっているコープルには届かなかったらしい。

「そうですか・・・。仕方ありませんね。ごめんなさい失礼します・・・。」

コープルがうなだれて去って行くとする。

当然マーニヤが強く引っ張ったので彼はフィーの前に戻されてしまった。

「ちょ、ちよつとコープル!」

「はい？」

相手が複雑な表情のまま顔を上げる。

「聞こえなかった？ごめん、私もコープルが大好きよ。」

今度は彼の耳にはつきりと届いた。

「ほ、本当ですか！！！？？」

信じられなかったが、すぐに現実だと分かった。

「うん。だって私、コープルといると何だか素直になれる気がするし、

ちゃんと相談に乗ってくれて頼もしくて優しいし。

だから、そう言ってくれてとっても嬉しいの。

・・これからも宜しくね？あ、あと私の事「さん」にならないから。」

「はい！！・・どうかこれからも宜しく、ファイー。」

するとマーニヤはやつとコープルのすそを離れた。

二人はそんなマーニヤを見て顔を見合わせると笑い合った。

それからしばしば空中散歩に出かける二人の姿が見られたと言う。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1863b/>

紡がれる絆(コープル×フィー、セティ×リーン)

2010年10月12日13時59分発行